

伝為家筆『金葉和歌集』



五番目の勅撰和歌集『金葉和歌集』は数奇な成り立ちの歌集である。天治元年(1124)4月、白河院は当代の和歌の第一人者・源俊頼に勅撰集の編纂を命じた。俊頼は同年中に歌集の編纂を終えたが、撰ばれた歌が古いとして院は却下する。この時の本を初度本という。俊頼は同時代の新しい歌を多く入れて編纂し直し、天治2年(1125)4月に再び奏上するも、新しすぎるという理由で却下。これが二度本である。さらに改訂を加えて大治元年(1126)か翌年頃に三度目の本の草稿を奏覧すると、ようやく受納された。この本を三奏本と呼ぶ。このような経緯にもかかわらず、世間に流布し、現在まで広く読まれている本文は二度本である。ただ、そのおかげで、この時代の歌人たちの試みや美意識が強くかがわれる革新的な歌集として、『金葉集』は享受されてきたと言える。

さて、この伝為家筆『金葉和歌集』の本文は二度本である。二度本にも初撰本から精撰本へと移行する様々な段階の伝本があるが(現存資料の中で最も精撰された

最終段階の本とされるのが本学所蔵の伝二条為明筆『金葉和歌集』[I-14]、本資料は精撰本の中でも比較的早い時期の本だと考えられている。本文は、鎌倉時代中期を代表する歌人・藤原為家(1198～1275)の書写か。為家は新古今時代の和歌を牽引した藤原定家の息子で、自身も『続後撰和歌集』『続古今和歌集』という二つの勅撰集の撰者であった。本学特殊文庫所蔵資料の中でもかなり古い書写の本であり、貴重な古典籍である。

兩架番号はI-12。鎌倉写。列帖装。1帖。縦22.3cm×横15.2cm。楮紙打紙。金茶菱窠地に横縞・牡丹唐草文・七曜文等の金欄表紙。見返しには銀箔を散らす美しい装丁である。外題「金葉和歌集」、左肩題簽で紺地に金泥で草花と霞を描く。内題、「金葉和歌集」。182丁。1面9行。1首2行書。「正宗敦夫文庫」の方形朱印。江戸時代の古筆家(古人の筆跡鑑定を家業とする人)である古筆了任(りょうにん、1610～1673)の極札「為家卿 金葉和歌集 全部一冊」が残る。